



学校だより

9月号

令和3年9月1日

～ まちのみんな ひとつになあれ ～



「かげおくり」

学校長 後藤 直樹

夏休みの終わりが臨時休業の始まりとなってしまいました。9月を迎え分散登校・短縮日程での授業開始とはなりましたが、感染防止に細心の注意を払いながら教育活動を進めていきたいと思えます。

この夏はオリンピックが終わると、感染症の爆発的拡大と大雨・洪水のニュースばかりが続きました。「どんな夏休みでしたか？」そう子どもたちに問いかけるのも少し躊躇してしまいます。活動自粛での休日となると、私の場合は結果的にテレビの前にいる時間が多くなっていました。8月15日のニュースでは例年の通り終戦の日が取り上げられていました。この、コロナ禍を戦争に例える報道もありましたが、実際にアフガニスタンの情勢など、全世界の出来事を見ていると、戦後の日本では長く続いている平和が薄い氷の上で維持されているようにも見えてきます。また、私が小学生だった昭和の時代に比べると、学校教育の中で戦争の悲惨さに触れる場面は、少なくなったように感じます。戦争経験者が少なくなってきたことや、終戦記念日がたまたま夏休み中であることも影響しているのかもしれませんが。

小学校では6年生の歴史学習以外にも戦争を扱った教材はいくつかあります。その中の一つに3年生の国語「ちいちゃんのかげおくり」（あまん きみこ 作）があります。保護者の皆様にもうっすらと教科書で学習した記憶があるのではないのでしょうか。私は担任として教壇に立ち、各場面での心情を読み取らせながら授業を進めていたこと、そして天気の良い日に校庭に出て、実際に子どもたちと「かげおくり」をやってみたことを思い出します。しかし今、担任という立場を離れてこの作品を読み返した時、改めて衝撃をうけました。愛情に包まれた家族を無情に奪い去った戦争という背景、そして一人取り残された主人公のちいちゃんが飢餓でもうろうとした意識の中、空の花畑の中で家族に再会する夢を見ながら天に召されてくという結末です。最近のアニメやゲームほど生々しい死の描写ではないので、「家族に会えてよかった」とハッピーエンドとして捉える子もいました。じっくりと読み返すと、限りなく重いテーマに胸が苦しくなるのを感じました。

感染症の拡大防止や異常気象への対応、加えて交通安全や不審者への対応と子どもたちの安心安全を守る取組は、どれ一つ欠かすことが出来ません。しかし、「平和教育」という視点は決して疎かにすることなく推進していきたいと改めて思いました。